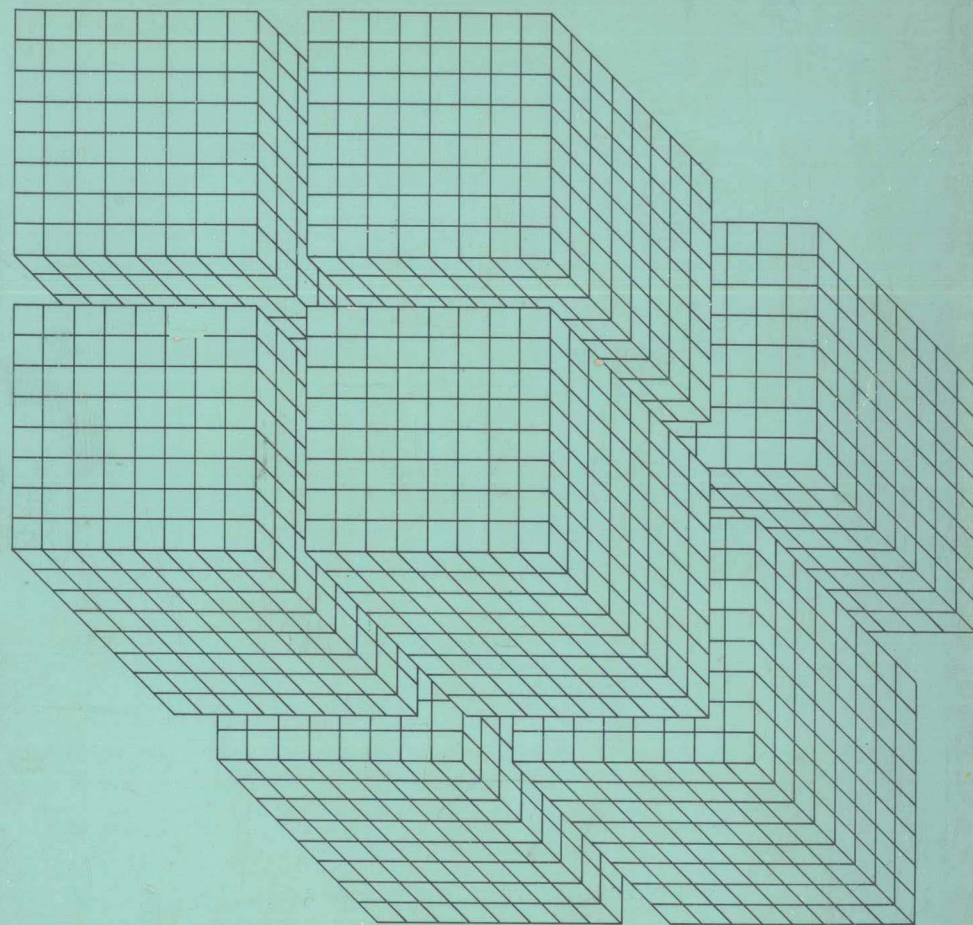
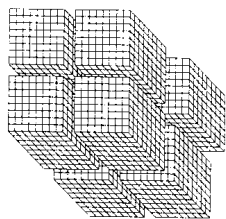




仕かけのある静物



富岡多恵子

仕かけのある静物

定価六三〇円

昭和四十八年四月十五日印刷
昭和四十八年四月二十五日発行

著 者 富岡多恵子

発行者 山越 豊

印刷所 三晃印刷

発行所 中央公論社

東京都中央区京橋二ノ一
電話 五六一一・五九二一
振替 東京三四番
©一九七三 検印廃止

目次

子供芝居 5

仕かけのある静物 33

半分忘れた歌 61

窓の向うに動物が走る 87

恋人たち 117

ドン屋桃太郎 149

中央公園 179

装帧
石岡瑛子

仕かけのある静物

子
供
芝
居

I

キンは九ツだったが、いつも大人の下駄をはいていた。夜中の二時ごろ、その下駄を鳴らしながら毎日ひとりでキンは帰ってくるのである。橋をいくつも渡り、市電のレールの上を歩き、いくつもの路地を曲って、下駄をひびかせながら長屋の角までくると、いつもキンはそのいちばん奥の自分の家まで走っていく。どこの家にもあかりは消えて、暗い長屋の路地の、敷きつめられたレンガのでこぼこに心せくキンの足元はよろけて、自分の家の戸口まではころぶように走るのである。昼間のあかいレンガの色は、夜の暗さに吸いとられて、両側に並ぶ長屋の狭間の底からは、キンの家の台所についているうす暗い電球のあかりがたったひとつの目印で、キンはそこへ向って走りこむ。

大人の、しかも裾を切った男物の長い黒いマントの下に、木綿の筒袖の着物を着て、キンは

ちいさな風呂敷づつみを脇の下にかかえている。襟巻き、手袋というようなハイカラなものはなく、夜寒の中で足も素足のままだった。キンは柄が大きく、だれもキンを九ツの子供とは思わないが、顔はお盆に目鼻の幼な顔で、ついこの間までは近所の男の子とお宮さんの石段の脇を滑ったり、棒きれで猫を追いかけていたりしていたのである。

暗い戸口から、うす暗い電球のぶらさがった台所へキンはまずあがり、狭い台所の流しの前に立ったままで、冷やめしを茶碗につぎ、それに水をかけて、たくわんの残りといっしょに勢よくかきこむ。夜食の用意も、手をあぶる火鉢の埋み火もないけれど、うす暗い電球のあかりが、母親のしてくれたたったひとつのキンへのねぎらいだった。

キンはマントを脱ぎ、三尺帯の間から大入袋をとり出して、電球の下で袋の中身を調べ、それをまた袋にもどしてから、めしつぶでていねいに封をする。あと何回大入りが出たら着物が買えるやろか、いっぺんよその子みたいに長い袖の着物が着たい、大入袋の列が三ツできたら買える、とキンは時たま出る大入袋を、台所の壁に背丈のとどこところから下に並べてはりつける。袋の中には銅貨一枚のもあり、三枚のもあるが、キンはそれをわざと数えてみない。袋が上から下まで三列になったら、全部の袋をやぶって、とキンは胸勘定し、着物はそれくらいあれば買えるとの見積りがキンにはあった。

もうほとんど床のところまで並んだ大入袋の列を、キンは上から順番に撫でていく。ところどころに中身の銅貨のない袋があり、それはたしか中身の多い袋だった。その袋の底は缺で切られて、だれかが中身を抜いていた。おかんが抜きはった、とキンは底の切られた袋を壁からひきはなそうとするけれど、うちが知ってるのんをおかんに知れたらあかん、と思ひ直して、その日の大入袋を列のつづきにはりつける。これやったら、五列ぐらい袋が並ばんと着物は買われへん、とキンは見積りちがいに気がつくのである。

台所のとりの部屋では、キンの父親と母親と、五ツの弟が並んでねている。台所にいちばん近いところにキンの蒲団が敷いてある。キンはその蒲団にもぐりこんで一刻も早くねむりたいのであるが、次の芝居のせりふを覚えなければならぬから、暗い部屋へ入ってねむることはできないのである。キンの出ている子供芝居は、半月もしたら出しものが変わるから、芝居と稽古がいつも重なっており、いつも次の芝居のせりふを覚えねばならなかった。

キンのかかえて帰った風呂敷づつみの中にある台本は、子供芝居の台本であるのに、大人が書いたものであるから漢字がたくさんあった。キンは学校を三年生でやめているから、わからない漢字は大人にたずねて平仮名でルビをふらねばならない。芝居小屋の忙しい大人は、つきまとうキンのような子供にいちいち漢字を教えてくれる暇はなく、暇のある大人も学校の先生

ではなかった。キンはいつも、わからぬ漢字はすこしずつうまくだれかれにたずね、覚えておいて、家に帰ってから、思い出しては平仮名をつけた。キンは今、それをして、その上でそのせりふを覚えなければならぬ。

となりの部屋から、キンは掛け薄団と枕を狭い台所の板の間にひきずってきて、二ツ折にした薄団の間からだをいれた。うす暗い電球のあかりの下で、キンは台本をひろげ、かぶさってくる重いまぶたをこすっているうちに台本が手から落ちて、冷えた台所のすき間風にも頼着せぬ子供はもうねむっていた。顔の上に置かれたままの台本をはらいのけて、朝母親がキンを起すまで、そのねむりは子供にとってはあまりに短かった。いっぺん、本を顔の上に置かんと、思い切りねたいなあ、というのが、九ツのキンのいちばんのねがだったが、そのねがいがかなえられるのはいつのことかだれにもわからない。

女のくせに、男の子の枕元に足向けてねてるアホがあるかいな、と母親はキンの蒲団をひきめくる。台所の板の間でねむってしまったキンの足が、となりの部屋でねている弟の第一郎の頭の方を向いていたからであるが、母親はいつも、女は男の枕元を通ってもいけないというのであった。うちはなんぼこなして逼塞ひつそくしても、女の子にそんなむちゃくちゃなことはしてもらわへんで、と母親はいうのであった。また母親は、うちはこの辺の有象無象とちごて、長袖

の家やさかいな、というのであった。長袖の家やいうけど、うちはいつかて長い袖の着物着てへんで、とキンがいうと、子供のくせに屁理屈いうて、ニワカやないで、とさすがに母親は笑った。

キンの家族の住んでいる長屋は、レンガ路地の長屋とみんな呼んでいた。それは、タワシで洗いこんだようなレンガが両側の家の間に敷きつめられていたからで、その家もちいさな家ながら、入口の格子戸から中の戸口まで一軒ずつ植木鉢を並べるくらいの所有地がついていた。

家は七軒ずつの向い合せて、それぞれみんなきれいな好きなのか、格子戸の汚れている家はない。

キンの家の真向いには、シズカさんという三十すぎの女のひとがひとりで住んでいる。シズカさんはどこかの植木屋の親方の二号さんだということである。このひとの家は、入口からことその他きれいで、すみずみまで掃除がゆきとどいているのが一目でわかり、夏ならば朝晩の打ち水、旗日には白地に赤もあざやかな日の丸の旗、正月には女所帯らしいちいさなしめなわ、格子戸の向うに並ぶ植木の鉢も、四季四季で花の色も変って、シズカさんの心づかいが見えるのである。ただ、その家の中に住むシズカさんはめったにレンガ路地へ出て近所のひとと立ち話をしたり、よその家へ心安く上りこんで喋るようなことはなかった。

おキンちゃん、うちのこんなあかい着物あげてもええんやけどな、そんなことしたらあんな

のお母ちゃんに叱られるからあげられへんのやわ、と遊びにきたキンが着物の手入れを眺めているのを見て、シズカさんは申しわけなさそうにいった。うちは自分で買うもん、とキンはシズカさんのいったことを変だと思った。おキンちゃんはえらいなあ。そうや、着物でもなんでもよそのひとにタダでももらたあかんのやで。自分で買うのがいちばんええのやから、とシズカさんはいった。うちはおかんが買うてくれはれへんもん、とキンはいった。おキンちゃん、あんたとこのお母ちゃんかて、あんたになんでも買うてあげたいんやで。そやけどな、きつと今はでけへんのやわ。おキンちゃんは芝居に出てるんやろ、ほんなら役者はんやないかいな。芸人にええ着物なんかいるかいな。芸人はな、ほしいもんあったかて、そんなもん知らん顔してなあかんのやで、とシズカさんはいった。

このシズカさんの家へキンが母親の留守にくるのは、例の台本の漢字の読み方をたずねるためであった。シズカさんはキンのさし出す台本を読んで、時々おかしそうに笑うことがあった。おキンちゃん、こんな芝居するのんか、こんな子供にできるのかいなあ。えらいええ道行やないかいな、とシズカさんはいった。うちは背^セが高いさかい、今度もまた男になるんや、とキンはいった。

朝起きてしばらくするとキンの父親も母親もいなくなってしまう。キンは五ツになる弟の世

話をしたり遊んでやったりして、昼すぎに母親が帰ってきたら芝居小屋へいくのである。キンが子供芝居に出るようになったのは半年ぐらい前からである。母親の遠縁のひとが幕内者で、そのひとの知り合いが子供芝居に出る女の子をさがしているといってきたのだ。父親も母親もはじめは娘を子供芝居に出すのをいやがったが、その給金をきいて母親は結局のところ承知した。娘はこの長屋にくる一年ばかり前までは、六ツの六月から舞と三味線の稽古をしていたから、子供芝居に出たらまた舞が習えるときいて芝居に出るといったのである。

芝居の大人のひとたちはみんないつの間にかキンのことをおキン坊と呼んでいた。キンは背が高く、男の役が多いからそう呼ばれることになったのだろう。芝居の道具方のひとは年寄りばかりだったが、芝居のせりふや所作を教えてくれるひとは三人いて、そのうち二人は若い男だった。芝居に出ているのは、五ツ六ツからせいぜい十二か三ぐらいの女の子ばかりで、年のいかぬ子はいつもだいたい腰元や家来になって並んでいるだけだから、芝居をするのはいつもキンと十二、三の子の五、六人である。

おキン坊、なんでヤヤコができるか知ってるか、と芝居を教えてくれるいちばん若い男がわざと真面目な顔をして芝居の合い間にたずねたりする。知らんやろ、今度センセが教^おせたげる、とその男は笑い、他の男たちも笑うが、キンにはなんにもわからない。その手をこうひく、そ

れから左の足をこう出す、ほら顔はこっち向けて、という風に三人はかわるがわる女の子たちに所作を教えてくれるが、時々、こうきて、こうきて、こうきて、と芝居とはちがう仕草で若い方の男二人が笑っていることがある。ところが、女の子がせりふを覚えていないと、三人のだれかが間違はなくその女の子の肩先を勢よくつつくのである。時には扇子が飛んでくることもある。すると道具方の年寄りが、ええ加減にしたりや、なんせみなまだ子供やで、と叫ぶのだ。

風邪をひいて、キンの声がかすれている時がある。すると若いセンセは、なんぞもつとうまいもんお母ちゃんに食べさしてもらいや、とみんなの前でどなりつける。年とったセンセは若いセンセにおっ師匠さんと呼ばれ、それにならって女の子たちもそう呼んでいた。おっしょさんは若いセンセみたいに女の子たちをからかったり、どなりつけたりはしないが、あんまり稽古がうまくいかない時などには、もうみんな、こんな芝居やめよ、なあ、いややわな、こんなこと。さあやめよで、やめたいいうてみんなの顔に書いたある、といってひとりですっぽ向いて黙っているのである。おっしょさん、そないいわんと頼みます、と若いセンセがいうと、あんたは黙っとり、わては芝居の好きな子とだけやりますよってな、とまだ知らん顔してキセルに火をつけているのである。そういう時はいつも、泣きべそかいた女の子たちの中でキンだけ